

療養環境研究会シリーズⅡ 第1回オープンワークショップ議事録
「ベッドとベッド柵」

日時：2008年10月3日（金）18:30～20:45

場所：パラマウントベッド・ショールーム（東京都江東区東砂2-14-5）

司会進行：井上由起子（国立保健医療科学院）

参加者：36名

1. 話題提供「医療介護用ベッドの開発と変遷」藤原康人（パラマウントベッド）

- ・消費生活用製品安全法が改正され、重大製品事故について報告書の提出が義務づけられた。介護用ベッドのベッド柵と病院用ベッドのベッド柵は同じものなので、病院で発生した事故についても報告義務がある。
- ・ベッドサイドレールの目的は、閉塞感の軽減、視野の確保など。
- ・手動ベッドでは患者本人が希望の高さに調節することは難しい。
- ・パラマウントベッドでは、病院や高齢者施設等で「ベッド調査」を行い、ベッドの劣化状況を報告書にまとめるサービスを行っている（有償）。

2. ベッド及びベッド柵体験

パラマウントの、最新のベッド（未発表のもの）の特徴についてデモンストレーションが行われた。A～Dの班に分かれ、新旧含めた4種類のベッド（そのうち1つは在宅用）についてそれぞれパラマウントのスタッフより説明を受けながら実際に触れたり臥床して体験した。

3. ベッド周りの写真に基づく討論および発表

参加者に提供された現場のベッド周囲の写真を教材として、A～D各班でディスカッションを行った。出された意見は以下のとおり。

- 使用しているベッドの高さや柵のはめ方がなぜ行われているのか、患者の状態像の把握が行われた。状態像に合わせた使い方が第一だが、現場では優先順位の第一をクリアするのが精いっぱい、「柵をはめる」が目的だと「柵の高さ」にまで意識が届いていないのではないか。
- 離床センサーをつけても、そこへマンパワーが追いつけていけないこともある。今回の新製品のようにベッドの工夫で安全確保に近づけることはありがたい。
- 介助バーを使用する人に4点柵を使用している写真に対し、状況としてはナンセンス。
- 現場では手すりの間違った使い方をしているので、啓蒙が必要。
- 施設内での物品には限りがあり、そのような状況の中でできるだけのことをした、とい

う結果、ベッド柵の本来の機能を果たせないような使い方になっている。

- ベッド柵がベッド柵である必要があるのか、柵は檻のようだし冷たい印象がある。異なる色や素材、例えば透明のボードのようなものでもよいのではないか。
- ベッド柵も行動抑制の一つであり、安全と人権の問題を孕んでいる。
- ベッド柵の高さが異なること自体が問題であり、統一をしてほしい。
- 最新式の物と古い物の両方が現場には混在しており、使用者が分かっていないと異なった使い方をしてしまう。
- 物品の使い方は患者の状態によって違うので、現場から情報提供をしていくことでもっとよい製品が開発されていくのではないか。

4. まとめ 横井郁子（東邦大学）

製品が発する患者のためのアナウンス（器械音）が流れると、看護者のリズムがくるわされる体験があり、医療の現場で使われている物品はスタッフに使いやすいものから、患者のためのものになりつつあるのだと実感した。看護する側も「モノ」を理解して使用しないと乗り遅れていくと感じ、これまで以上に物品に込められた意図を把握したうえで使用していく必要がある。

（文責：渡部）